法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-10

【書評】小林亜津子『生殖医療はヒトを幸せにするのか ： 生命倫理から考える』 （二〇一四年、光文社） 生殖医療の進歩がもたらすモラル・ジレンマ

AIHARA, Hiroshi / 相原, 博

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
54
(発行年 / Year)
2016-03-20

【書評】
小林亜津子『生殖医療はヒトを幸せにするのか―生命倫理から考える』（二〇一四年、光文社）

生殖医療の進歩がもたらすモラル・ジレンマ

相原　博

本書は、生殖医療にかんするモラル・ジレンマを手がかりに、子どもを望むカップルと当事者以外の人たちとの認識の隔たりを架橋する試みである。

本書によれば、生殖医療の進歩は、不妊に悩むカップルの切実な望みをかなえる一方で、家族関係をめぐる新たなジレンマを生じさせている。だが私たちには、それらのジレンマに対処する倫理が未だ存在していない。そのため、新たな技術によって子どもを授かるカップルが増えつつも、当事者でない人間は技術の利用に批判的になる。新たな技術は「救済」であるのか、それとも「不自然」であるのか。両者の認識には大きな隔たりが認められる。そこで著者は、この隔たりを埋めるために、ジレンマをともに考えることを提案するのである。

本書において著者は、生殖をサポートする技術の倫理的是非については判断しない。むしろ著者は、生殖技術にまつわる諸々のジレンマを紹介し、読者が「自ら考えること」を要求している。本書が取り上げるジレンマは、映画やドラマの実例をもとに、具体的な問題として紹介されている。例えば、精子バンクを利用して子どもをもつ、選択的シングルマザーの存在をどう考えるべきか（第二章）。また遺伝子解析技術と着床前診断の利用によって、受精卵を選別できる時代は幸福かどうか（第四章）。あるいは、体外受精と代理出産によって変わる親子関係をどう考えればよいのか（第五章）。どの章で扱われるジレンマも、私たちにとって決して無関係の出来事ではない。というのは、紹介された生殖をサポートする技術の多くが、日本で

も利用可能になりつつあるからである。

このように、実例をとおして読者に考えさせる点で、本書は生殖医療のジレンマを提示するだけでなく、生命倫理学の教材としても有益な示唆を含んでいる。また書評者の理解によれば、これらジレンマの考察をとおして読者が直面するのは、結局のところ「家族とは何か」という問題であろう。生殖技術の進歩によって「新たな家族」が可能になった現在、私たちはあらためて、家族について再考することを要求されている。その意味で本書は、現代の家族論へと読者を誘う入門書でもある。